

# たより

## 『美紗の会』 ニユース 第46号

平成十六年一月二十八日

発行者 「美紗の会」  
☎03-3441-2726  
編集責任者 大久保 朋子

### 新年に思うこと

西松 布 咏

人間覚悟に至って

香り立ち

元旦のお屠蘇の香りにほろ酔い機嫌でばかりとららかな空を窓越しに眺めていたとふと本棚に並んでいた浅葉克己氏の「生きる力を下さいトバ文字」が目に入りしばらくはめくっていたらこの言葉に出会いました。

中国雲南省納西族の何とも素朴でユーモラスな東巴文字に寄せるメッセージ。  
そう言えば昨年私の心にこの言葉が浮かんで消えては又浮かんでいたように思います。

もうこのあたりで覚悟を決めて生きてゆかなくてはと私は「秘すれば花」が好きでした。だから「秘すれば唄」を唄ってきました。

あからさまに主張するのはなく時間が来れば自然とほんやりかたちは見えてくる。それまではゆっくりひっそり歩んでゆきたいと。でも昨年は親しい方々、身近な友人の死に遭遇し、限りある命の儚さと世の中の不穏な日常の中で私の心の扉を何かかきしりに叩くのです。もう思う通りに歩み始めなさいと。

伝統芸能のしきたりにとわれずまず楽しく自由な雰囲気なのなかで稽古を続けてゆきたい



いと発足した美紗の会も昨年二十五回を迎え記念の会を開催し、ようやく方向性が見えてきました。私は従来の名取り制度に疑問を抱いていたのですがやはり数十年前精進してきた会員に、より一層芸を磨いて欲しい、共に舞台を務めて欲しいと思うようになりまして。そして「時分の花」が開く時が来たのではと、思うに至りこの春初めて美紗の会から名取りが誕生することにしました。

何かを表現するにはまず己を無にすることから始まりますが時間をかけてゆくりうちに心、技、体が一つになつてやがてかたちが備わってくる。それには日々の稽古の積み重ねがあったからこそ、ようやく思えるようになりまして。それは決して大仰なことではなく自然と備わってきた心のあらわれなのです。

昨年その思いを忘年会で話したところ多少受け止め方に温度差があったものの賛同を得ることが出来ました。昨年の美紗の会の演奏会に本郷会長がこのように挨拶してくださいました。「物から心、論理から情緒、

3月14日(日)1時より  
NHK青山荘「あじさいの間」  
第27回 美紗の会  
おひきぞめ

- このたび、新名取りが五名誕生いたしました。  
二月十五日に名取式をとり行い、演奏会にてご披露させていただきます。
- 岡崎 慎一 こと 己紗一咏
  - 小高 忠雄 こと 己紗忠咏
  - 大久保朋子 こと 己紗朋咏
  - 川邊 紀恵 こと 己紗紀咏
  - 照沼太佳子 こと 己紗佳咏

「西松師匠とコンサートで共演」こんな夢のようなことが、ネドコ・コンサートで実現しました。  
「ネドコ」とは落語の「寝床」に由来しています。断「寝床」は、義太夫に凝っている家主が皆に聴かせようと、番頭に長屋を廻らせますが、長屋の連中は毎度のことでうんざりし、口実を設けて断ります。店の者も仮病を使って聴こうとせず、女房も子供を連れて里に帰ってしまいます。  
落語の「寝床」や「茶の湯」の主人公のような下手の横好きのかわい御仁は、昔から多かつたようで、江戸期の断本にも同じ構想のものは多数あります。  
最初は素人演奏会として、東京大学の橋先生が中心となって始まったネドコ・コンサートは、加藤登紀子さんのお姉さんの加藤幸子さんの店を会場とし、出演者は迷惑料を払うというところで発足しました。が、回を重ねるにつれて出演者の腕前も上がり、私が飲み会員となった頃には、プロの

文明より文化、を大切にする時代にますます情が通ってきまして。邦楽の世界は情緒の世界で日本固有の文化ですが師匠の活動を見ていくとグローバルにももの考える人達に理解されていると思います。美紗の会はベテランは勿論ですが中堅や新人にも意欲的に邦楽を勉強したいという熱意が感じられて素晴らしいことだと思つていきます。と。昨年はくしくも三枚目のCD「儂」のタイトルのように悲しいことが続き、儂い人の世を実感しましたが限りある命だからこそ、今年心と心をつなぐ絃が色々な音色になって、はるかに遠くまで響いてほしいと夢見ております。

冬の花で好きな花は水仙。北風が吹いても空が曇って寒くても凛と背筋が伸びている。群れていても一輪でもすっきりと香り立っています。これからも美紗の会はそうありたいと願っています。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

ニツクに陥りかけています。口上が終わり、再度舞台上での音合わせ。出番直前に調弦したはずなのに糸が伸びて音が下がっている。舞台上で余裕のない私は糸の微妙な調整に手間取っています。すかさず、司会の田中優子先生が「三味線は、糸が緩みやすく、難しく楽器……」と場を繋いでくださった間に、やっと調弦が終わりに「トッテトッテ」と開始。あれ、私の二の糸が狂った感じと思つているうちに、あつ空打ち……。なんとか「坂はてるてる」が終わり、続いて調子を六本から四本に下げて、「あおおやあざい」の唄い始めました。が、どうも四本でなく二本になっているようで、低すぎて声が張れない。(うう苦しい)すると霧のような視界の中から急遽用意されたマイクが目の前に。どうにかおさらいの時のような緊急停止もなく唄い終わり、師匠に「はるううの」と唄を引き継いで頂き、待ちに待った最終部「トントト・シャン」に到達しました。楽屋への通路で冷や汗を拭いていると、師匠の唄「玉川」が始まりました。師匠のオーラが漂っているような舞台姿と凛とした唄、やっぱりええなあ。そして演奏後に飲んだ白ワインの旨さ、まるで何日も禁酒したときのように喉から身体にしみ込んでいく。こうして私の長い長い一日とコンサートデビューは終了し、数十年ぶりにたとえ結果が赤点でも後期試験が終了したときのように、なんともいえない開放感と疲労感に包まれないながら家路に着きました。末筆ながら、司会の小野さん、田中先生フォローありがとうございました。

寝床コンサート顛末記  
縄岡 好人

さて、第八回ネドコ・コンサートは、テアトロスガリー青山で一月七日夜六時半に開演しました。私は途中道に迷って十分程遅刻。手渡されたプログラムを見ると、今回はパイオリンの千住真理子さんやジャズピアノの遠藤律子さんなども遊びに来ていて出演。加えて、私の出演は十五演目中の十三番目となっております。出番まで、酒を飲むわけにもいかず、その間緊張しながら待つ辛さ。去年の今頃はもうかなり飲んで酔いが回って来ていたなあと思いが回って待つこと三時間。やっと出番で舞台へ。なんと舞台にはイスが用意されているではありませんか。これまで正座でしか弾いたことがなく、三味線はともかく、しびれのきれいなところには自信があったのに、初の椅子での演奏とは。「昨年このネドコ・コンサートでゲットしました弟子です。ネドコでゲットってちよつと誤解されそうなんです。ではと弟子が言っています。坂はてるてるでは替手をやってもらいます」と師匠の口上が始まりました。その傍らでは私は、舞台の照明の眩しさに逆光となり棹の譜尺が全く見えず、パ

# シルクソウル霜月

川崎隆章

太陽暦十二月五日。夏に続き、再び江戸の残り香が点在する地下鉄新富町駅近くの和食のお店「素処(そこ)」で布歌師匠の独演会「シルクソウル・霜月」が開かれました。

「霜月」という十一月の呼称ではないかとおっしゃるかたがいますが、これは太陰暦の時の月の呼称です。十二月月上旬であることを考えれば「旧暦」霜月のほうがふさわしく、また、一年の収獲を終えて田畑にうっすらと霜がおりはじめるというの、いかにも現在の十一月中旬から十二月中旬にかけての気候と一致します。

今回(霜月)は、前回(七夕)と舞台の趣向を変えませんでした。「素処」のスタッフの皆様のご協力で照明にも変化をつけることができました。曲が進むに従って「明かり」が「灯り」となり、最後は「月あかり」に消えてゆくという時の変化を表現。秋が去り、冬のとば口にかかった、もの侘びしく、一年が心の中で熟しはじめる季節の演出を心がけました。

午後七時開演。いつもの序奏に続いて、まず端唄「夕暮れ」。途中「船に船頭」のアンコ入り。「十二月」というと師走じゃないか、と言いますけれど、師走をタイトルにするとうとうしても師が走るって言うんでナンだかせわしなないので、何か他にいい季節がないかなと思っていました。霜月という素敵な言葉がありました。旧暦だと今日は十一月のまっ

ただなかとということになります。雪待月なんて言い方もありました」と、開口一番布歌師匠のご挨拶。

二曲目は「文弥くずし」。大坂の浄瑠璃語り・岡本文弥が創始したのが文弥節で、泣き節とか愛い節と呼ばれる。しつとりとした曲調だったのが、やがて義太夫節に座を譲って消えてゆきました。「文弥くずし」は途中に文弥節を入れた賑やかな唄。「これから忘年会で賑やかな事が多くあると思えますが唄の中の「いっばい呑め呑め」というくどりは、一杯(ひと)づなのか、いっばい(沢山)なのか、そこは皆さんの酒量にお任せしたいと思えます。」と師匠。

続いて小唄数曲。まず「ほんのりと」。女心を晩秋の情景描写の中に巧に隠した粋な謎解き。つぎに「辰巳よいとこ」。江戸で評判の高かった気つぶの良い辰巳若者へ捧げられた伊東深水の作。そして忠臣蔵ゆかりの「四條の橋」。世を欺くため京都市中で大いに酔態してみせた大石内蔵助が川風に吹かれながら唄ったという深い覚悟の唄。さらに「年の瀬や」。討ち入り前後、偵察に出た大高源吾と、討ち入りをするうすうす感じとていた大高の俳句仲間・宝井其角が両国橋で交わした「年の瀬や水の流れと人の身は(其角の投句)」「明日待たるるその宝船(源吾の返句)」という男同士の秘めた心のやりとり由来します。どういう訳

か男の気持ち唄った小唄はしみりとしてカッコ良いんですね。ズルイと思うんですけど(笑) それでは、しみりからほど遠い女性の本音の唄を唄わせていただきます。とあって情を立てた旦那とお座敷に現れた素敵なカタとの間で揺れる去者の心を唄った「お互いに」。 「ソウは言うものの、女性だつて、自分の旦那様がヨソの女性に目をひかれるのは面白くはございませんで、どなたも一積(ひと)づな思いますが(笑)」で「様は山谷」。

お馴染みの「チクシヨウ」がキマって、座がすっきり和みました。ここで照明を少し落とすという事で「海雲寺」。北品川の曹洞宗のお寺で現存市川の真間をはじめ各地の紅葉の名所を唄い込んで、やっぱり海雲寺の紅葉がいちばんだ、と褒め称えます。

そして歌沢を二曲。晩秋の隅田川、吉原へ向かう道すがらの風情を唄った「枯野」と、苦界であるがゆえに表だって逢うことができない切ない恋を唄った「更けて逢う夜」。ここで師匠は一年の思い出を静かに語りました。まず、数々の粋を残して彼方の人となった内藤さんの思い出。次に、「ニューアンスの会」にご出演頂いたこともあり、布歌師匠の芸を大きく理解してくださっていた、舞踏の創始者土方巽未亡人・元藤輝子さん。国際的な創作家でもあり「アンコールワットで一積(ひと)づなマンズしまししょうよ」と意気投合した矢先、十月十九日に逝去されました。そして、同日、布歌師匠とは富本節の稽古場で知り合いになって三十年来のつきあいという武藤都

## お知らせ

- 二月二十日(金)六時半開演  
銀座七丁目「銀座ライオン」  
六階 クラシックホールにて  
「江戸の聲」 会費 一万円  
(お食事・飲物共)
- ★三味線にのせて江戸の粋を語る絹の唄声の西松布唄  
★江戸の意気を人情で語る諧謔の話術師の春風亭勢朝  
昨年十一月にリニューアルし百四十年の歴史を誇る「銀座ライオン」が江戸開府四百年を記念として銀座に春を呼ぶ「江戸の聲」をにぎやかに華やかに開催します。
- 美紗の会の新名取 己紗紀唄・己紗佳唄が初舞台を務めます。
- 三月二十一日(月)二時より  
国立小劇場  
花柳瀧二門下による「龍二会」 西松布唄が地方として出演  
地唄「ことぶき」「三國一」「鉄輪」  
上方唄「京の四季」「松づくし」「文月」
- 五月三日(日) 七時より  
山中温泉 山中座において  
「江戸の香りと湯けむりと」  
自主公演
- 五月三日(四)に山中温泉漆まつりが開催されるにあたり、その中心地にある豪華な蒔絵をほどこした漆の館で、春爛漫のひとつときを楽しんでいただきたいと企画いたしました。
- ゴールデンウィークでもありますので、皆様お誘い合わせの上、ご来場下さいませ。



### 編集後記

二〇〇四年最初のたよりで、今年も皆様の御協力に支えられ、より充実し、楽しい紙面になる様心がけてゆきたいと思えます。

世の中きな臭い風が吹いていますが、平和で幸せな年であることを祈るばかりです。

大久保